めだか大学通信　6号

20012･7　　岡田京子

6号のメインは「笠木透作詞連続講座修了コンサート」であるべきなのですが、それが6月30日なので通信が間に合いません。そこで、次のそれぞれのグループの7月の会で、その感想をしっかり話し合いたいし、それぞれの皆さんの参加しての感想文を8号のメインにします。この号は、一つ経験を積んだ皆さんの新たな参考として、小泉文夫氏・岡林信康氏の本からの抜粋を出しておきたいと思います。次の集まりには、この号を必ず持参してください。

小泉文夫氏『おたまじゃくし無用論』より　　１９８０

「伝統音楽を基礎にした創作」

青少年の時期には、新しい歌を作ったり、好んで音楽を作曲したりします。これは、この時期の子どもたちの注目すべき音楽活動の
一つです。

中学生、高校生の友達が何人か集まって、みんなでギターを抱えて一生懸命やり出すとたいていの親は「うるさい、そんな暇があったら勉強でもしなさい」などと言って､それをつぶしてしまおうとしますが、これはマイナスです。

最初から､聴けるような良い作品が出来るはずがありませんが､それを聴いてあげる、そして批評してあげる態度が大切なのです。さらに、もっとこういうやり方の方が良いんじゃない、と言うような意見を言ってやる、そういう形で外側から励まし、さあ、その調子でもっとやってごらん、と力づけてやるような環境が、一番望ましいのです。

ところでこの創作ですが、歌を作るということは､何もこの時期にとつぜん始まったのではありません。

わらべうたなどというものは、ほとんどが先輩から聴いたり友だちから聞きかじったことを、半分はそのまま受け継ぎ、半分は自分の創意工夫や新しい要素を織り込みながら作っていくのです。

わらべうたでは、受け継ぐということ自体が、半分創作を含んだ、あるいは創作といいながらも、実は古い要素を多分に盛り込んだ、そういう伝承の形態なのです。

だから子どもたちは､遊びながら常にそういう創作活動をやっているのです。それが伸ばされる環境を与えられればわらべうたや学校唱歌、あるいは歌謡曲

などを土台にしながら、いろいろな替え歌を作ったり、違う言葉を織り込んだり、二つの異なったものを一つにくっつけたりして歌うとか、様様な組み合わせで新しいものを作ったりもするようになります。

このような活動を、幼児から児童の間にやってきますと、中学生になって、ギターを買ってもらい、それを初めて爪弾くときに、ごく自然に、小さい時からやって来たことの延長として、歌が作れるのです。

いきなり何か新しいものを生み出すというのではなく、このようにひとりでに身についた創作活動が、一番望ましい姿です。

ところが、今の日本のフォークソング・ブームは、アメリカの若者のカッコいいシンガーや新しい歌に憧れて、その真似をしているにすぎません。

フォークソングとは、その言葉通り民踊のことです。現代のフォークソングは、先ずアメリカに出現したピート・シーような天才たちが、従来のフォークソングに、新たな二〇世紀の生命を蘇らせたのが始まりです。これまでヨーロッパから受け継がれて、型にはまって身動きがとれなくなっていた白人たちのフォークソングに、新たな命が吹きこまれたのです。

新しく生み出されたこれらの民踊は、たちまち全米を風靡し、こういうフォークソング運動はボブ・ディランとかジョーン・バエズのような政治的な状況を踏まえた歌手によって、新しい若者の歌としておおきな共感を巻き起こしました。これが海を越えて日本に渡ってきて、現在のフォークソング・ブームとなったのです。

ところが、日本にはわらべうたや民謡にあるような、日本のフォークソングの伝統があります。アメリカ渡りのフォークソングも、民踊なのだから、それならばどうして、日本の伝統の民踊がここに生かされないのか。これはフォークソング・ブームが起こった当初から一部の批評家や社会学者などからも指摘され、若者たちも気がついていた点でした。

しかし実際、お手本になるアメリカのフォークソングは、西洋の音階やリズムで出来上がっています。また西洋の音楽を演奏するのに便利なギターという楽器を伴っています。

ところが日本のわらべうたや民踊は、音階もリズムも、それに適するハーモニーも違い、西洋の音楽とは全然別の基礎に立っています。だから、西洋と日本のフォークソングを結びつけることは、よほどの努力なしでは出来ないことです。

けれども、何か新しく生み出したり、古く、長くうち捨てられていたものに、再び新たな生命を与えたりする創作と、単なる模倣、ものまねとは全く価値が違います。創作には、努力と積み重ねが必要です。その努力や積み重ねは外国からも学んだ借り物の上にではなく、伝統的なものを基盤にしなければなりま

せん。
　子どもの音楽教育に、わらべうたが大切だ、日本の民謡に親しみを持たなければならない、そして常磐津や清本のような伝統的な音楽にも興味を示さなければならないと私が強調する根拠は、実に底にあるのです。本物の創作は伝統的な体験を基礎にして生まれます。
　中学生・高校生の段階で、フォークソングを歌い出すと言うこと自体は、大いに奨励しなければなりません。しかしそれが借り物でない、ほんとうの日本の若者の歌に育つためには、小さな子どもの頃から、日本のわらべうたや民謡、その他の伝統音楽に親しんでいることが必要なのです。それを基礎にした経験や努力が、ギターを爪弾きながら歌える新しい日本のフォークソング、ほんとうの日本の若者の歌を誕生させるでしょう。
　現在の、日本のフォークソングの最も弱い点は、以上に述べたとおりです。私の理想とするような音楽教育を受けた子どもたちが大勢育ったとき、粉の問題は、初めて解決されると思います。

岡林信康著『ぼくの歌の旅』より　　１９８７

●　1980年と81年。2年続けてロンドンとニューヨークに行きました。その間、小さな場末のライブハウスから大ホールのコンサートまで大小合わせて40あまりのコンサートをみたでありましょうか。
　その後日本に帰ってきて、いろんなところで耳にする日本人の音楽と称するものの多くが、ロンドンやニューヨークで聴いたものの焼き直しであり、コピーであり、もっとハッキリにいえば盗用でありサルマネにしか過ぎないとしか思えなくなってきたのです。向こうの事情に詳しい人がちょっと向こうのものに手を加え、日本語の歌詞をくっつけて小器用にまとめて作り上げたものが、日本人のオリジナルとしてこの国ではまかり通っている。が、アメリカやヨーロッパのミュージシャンから見れば、まさに自分たちの作り出したものの安っぽいイミテーションに過ぎないじゃねえかと多分鼻先でせせら笑っているのではないだろうか。
　二年続けて向こうに行けば、そこいらへんの事情が否応なしにわかってしまって、物マネ大国日本で歌手でございと大手を振って歩いていた自分の姿のこっけいさにガクゼンとしてしまったのです。言葉だけが日本語で、あとはすべて借り物、向こうのものに無理やり日本語をくっつけたような気持ち悪さ。それを気持ち悪いとも感じず、たとえばフィリピンのバンドや韓国のロックバンドが彼らの国の言葉で歌うのをコッケイだと笑う救いのなさ。アメリカやヨー

ロッパのミュージシャンが、日本語で歌う日本人のバンドを、どんな気持ちで聴いているかも分からぬおめでたさかげん。悔しいけれどこれが現実でおます。
　物真似ではないオリジナルとは一体何なのだろう。こんなことを悩み始めたあたりから、どうも歌が書けなくなってきました。何を書いても向こうの物真似にしか過ぎないのではないかというアリ地獄に落ち込んだようなものです。外国にさえ行かなければ、直接向こうのものに触れなければ、井の中のカワズとして、たとえ錯覚でもミュージシャンでございと胸を張っておられたのに。
　日本語にしっくりと溶け合うサウンド、リズムとは一体何なのであろうか。
　初めて日本古来の民謡を真剣に聴いてみました。今まで気にもとめなかったそのリズムがいかに複雑かつ繊細な物であるかを知り、いやもうビックリしたのです。カネや太鼓や小鼓がそれぞれ異なるリズムを打つのですが、それらバラバラのリズムが複合リズムとなってあのエンヤトットの世界を作り出しているのです。一人でカネ・太鼓・小鼓の何役もこなす西洋のドラムセットではとうてい打ち切れない複雑なリズムなのです。これにボーカルをのせれば、まさに日本のオリジナルなロックではないか。日本語と見事に溶け合ったロックではないか？民謡を古くさいものとして押し入れにしまい込んでおくのではなくて、また単なる古典として継承するのでもなく、現代に生かし蘇らせることは出来ないのであろうか。
　そういえばジャマイカのミュージシャンたちが生み出したレゲエも、ジャマイカの民謡を基調として、それを現代のロックに展開したものではないか。あのリズムはそれまでのアメリカ・ヨーロッパのロックにはなかったリズムであり、白人ミュージシャンたちにも大変な影響を与えたわけです。
　しかし考えてみれば、西洋の物真似ではない、自分たちのオリジナルを作りたいと言うような大問題がそうカンタンに解けるわけではないのです。大げさに言えば、明治維新以来血まなこになって日本が追いかけてきた西洋至上主義に対する見直しがようやくいろんな分野で行われている今、それが僕個人の中にも現れたと言うことであり、ただ単に歌の技術的問題ではなく、もっともっと根の深い自分自身の存在にも関わるような大問題だったのです。
●サムルノリ…四物遊撃…　その名の通り四種のカネや太鼓を汗みどろになりながら打ち鳴らす彼らの演奏。血を燃え立たせ、眠っていた何かに火をつけ揺さぶる。そして地の底からわき出るような歌声と、腰を抜かさんばかりに驚嘆させてくれる、信じられないほどダイナミックな踊り！
　彼らと話すことで目を見開かされたことは多い。リーダーのキム・ドクスは言った。
「岡林さん、僕たちは日本を兄弟のように思っています。歴史的に不幸なことがたくさんありましたが、兄弟のように思っています。私たちの半島から日本

に渡った文化もたくさんあります。日本のルーツでもあるのです。日本の民謡のリズムは、すべてサムルノリの叩くリズムの中にありますよ。協力しましょう。物真似でない自分たちの歌を早くつくってください」
　踊りの名手チェ・ジョンシルも言った。
「自分のやって来たことが、実はただの物まねではなかったかと気づくのはとてもつらいことだけど、実は素晴らしいことなのだ。それは自分を発見することの始まりだし、自分になって行くことの第一歩なのだから」